

久々に、痴漢にあった。

大井町線の中である。二子玉川駅〜大井町駅区間を走る急行列車の第一車両はその両方のターミナル駅の改札がどちらもホームの一番端、大井町方向の第一車両側にあるため、自然多くの客が乗り込む。もっと後ろの車両に乗れば、もう少し空いているかもしれないものを、乗るときに最も手前にあり、降りる時に最も改札に近いのであれば、多少の混雑を我慢しても手近な車両に乗ることを選択してしまう。自分もそうであるし、他の多くの人もそうなのだろう。田園都市線や東横線のように殺人的な通勤ラッシュで悪名高い他のメジャーな東急系列の路線の中で、割合知名度が低いこの都会のローカル列車はさほど朝ラッシュが厳しい印象はなかったが、この第一車両の混雑は、かつて経験したどの通勤通学ラッシュよりも悪質で精神的な圧迫感が強かった。

それは、私がこの電車に乗って向かう行き先、つまり会社に対する嫌悪感に比例して高まっている、ことも否定はできない。今の会社。半年ほど前に入社したこの会社で、私は隣の席の直属の先輩に、こっぴどく苛められている。毎朝五分程度遅刻してくるその先輩は、遅刻しておいて大変不機嫌な様子で出社すると、到着早々、物凄い勢いで大きな音をたててバッグをデスクに置く。そして、大きなため息をつきながら、パソコンを立ち上げる。私の仕事は彼女に質問をしなければ進まないものが大半なのだが、質問をするための適切な言葉を考え、自分の精神状態を整え、タイミングを見計らって質問をするまでに小一時間はかかる。そうして万全な準備をして臨んだとして、質問をした瞬間に、地獄に落とされるのは目に見えているのだけだ。

九月に入社して、今は二月。冬である。私の精神状態もまさに冬である。毎朝の通勤は強制収容所行きの貨物列車に乗っているかのようなのである。それでも、とぼとぼと駅のホームに上がってきて、第一車両よりも後ろの車両に、大井町駅で同じ距離をまた歩かないといけないことをわかった上で、歩みを運んで乗るといふ余計な労力を使う気にはなれなかった。正直いって、会社についてから押し掛かってくるであろう圧力に比べれば、大井町線の第一車両で圧迫され受ける肉体的な痛みなどは、大したものではなかった。むしろ、快適な場所だから降りかかる数々の嫌がらせへの恐怖を募らせるよりは、車両内に一緒に閉じ込められている人たちと鮫詰状態で自分自身の重心をどこに預けなくても人々の間に挟まれたまま遠くへ運ばれていく、何かの流れに身を任せてしまっているほうが気楽でさえあった。

冬は特に、すしづめ状態のほうが暖かくて安心感があり心地よさすら感じられた。スーツを着た中年男性に寄りかかって iPhone で音楽を聴きながら、思考を停止させる。目を固くつぶり、完全なる自分の世界に入り込む。いつも半分以上は夢の世界だったが、それで、すっかり油断していたのである。痴漢なんて、中学で電車通学を始めた時に、小学生に毛

が生えたような若い少女を好む変態に何度か狙われたことがあるぐらいで、その後意志をもって痴漢対策をしてきたことも功を奏したのか、また大学、社会人生活を通じて私服はパンツスタイルが多かったからか、十四歳の時から十五年間、数えるほどしかあつていなかった、私である。

それで、いつものように鮎詰の車両の中で安心しきって、乗客の肉体が作り出す縦型のベッドに身を任せていた。何だか背後からバッグをごそごと弄られるような感覚を一度覚えて、スリか、と神経を尖らせたが、まもなく収まったので警戒をすぐに解いてしまったのが失敗だった。それでも何らかの違和感は継続してあつた。大井町駅で人々が解放されて、ホームに押し出されたとき、私はまさかと思ひコートのおかげから自分の臀部をさわった。異物が手に触った。気持ち悪い。だがその時感じた感覚は、何度か痴漢にあつた際に感じた、全身の毛が逆立つような嫌悪感・恐怖感とは異なつていた。思ったことは二つだった。

「もっと若い子を狙えばいいのに」

そして、

「何で彼氏の『液体』はもう三か月私の体に向けて発射されていないのに、知らない変態野郎のものが発射されてしまったのだろう」

——十五年の間に私は、ずいぶん遠くまで来てしまったようだ。

会社に着いて、パソコンの電源を入れ、立ち上げている間にトイレにいった。汚されたコートを持って。コートは二年ほど前に買ったグレーのウールのファー付のものだった。もうだいたい古着古した感があつたので、ここで捨てることに何の未練もなかつたが、夜に友達とごはんを食べに行く約束があるのですぐに捨ててしまうわけにもいかず、今日一日はこのコートを着なければいけないのかと思うと、さすがに暗い気持ちになつた。洗面台で異物を洗い流す行為も全て何の感情も込めず機械的に淡々へ行つた。『ドラゴンタトゥーの女』のリスベットのよう。洗面台の上の鏡を見ると、血色の悪い、痩せた暗い目つきの自分がいた。でもどこかに性的な匂いをする顔だった。だが、あくまで健康的な魅力ではなかつた。なぜ私は、湧太と付き合っているのだろう。いや逆だ。なぜ、湧太は私と付き合っているのだろう。私の何がいいのか。彼と付き合いだしてから、何度も心の中で繰り返してきた言葉である。我ながら、ネガティブな問いだが、この思考を変えることはできなかつた。今日、私は彼に抱いてもらえるだろうか。抱いてもらったら、褌になるだろうか。手が冷たさに耐えきれなくなつてきた。私は洗うのをやめた。

\*

「高木さん」

と、低い声で呼ばれた。正岡さんからである。隣の席からなのに、ずいぶん遠くから聞こえる気がする。

「このデータさ、また間違ってるんだけど」  
そしてまた延々と説教が始まる。周囲の人が耳を敬っているのがわかる。

去年の九月、転職をしてこの会社に入った。インターネット広告の代理店である。私の仕事は営業アシスタント、つまり事務職である。入社初日、教育担当の先輩として正岡さんを紹介された。三十代半ばくらいのやや太った女性で、髪の毛を丁寧にお団子にし、ゆるいアジアンテイストのチュニックを着ていた。その体型と服装に似合わず目つきは鋭く、一目でこの会社の「お局」であることが分かった。明らかにコミュニケーションを取りづらそうな雰囲気、私は人事担当者に随分高く買われてしまったな、と思った。何もこんな人を教育担当につけなくても、とは正直な感想だった。

「この人痩せたら綺麗なんじゃないかな」

彼女の神経質そうな話し方の自己紹介を聞きながら考えた私の目に微かに笑いが走ったのを、彼女は敏感にとらえてしまったのかもしれない、というのは後になってから思ったことだった。

同棲している湧太には、早速このとんでもない出逢いについて、報告した。彼は男らしく「余り気にしないで、上手くやったほうがいいよ」とあっさりと言った。こういう時、男というのは余り役に立たない。女の子だったら、「それはめんどくさそうだね」というところから、まだ起きてもない悪い事態についてあらん限りの空想をたくましくさせて、恐ろしい出来事への耐性をつけるのを手伝ってくれるのだが、自ら会社を立ち上げて、通常の二十代後半男性よりも心身ともに仕事に打ち込んでいる湧太は、「働く」ことに対してネガティブな姿勢をとることを、自他ともに許さない傾向があるように見えた。

正岡さんとの関係は、実際のところ、初めはうまくいっていた。彼女は見た目通り、三〇代後半だった。そして独身だった。妙齢、という言葉は「適齢期」がもつとずつと若い頃だった時代の言葉で元は二十歳前後の女性を指すらしいのだが、現代では、三十代後半こそが妙齢と呼ぶに相応しいだろう。絶妙に繊細な神経と身体を抱え、結婚という二文字を常に意識しながら生きる年頃の女性。その繊細な神経を刺激しないよう、適度な距離を保ちながら私は、仕事ができる故にプライドの高い彼女を出来るだけ持ち上げて気持ち良くさせることに注力した。馬鹿げた冗談でいつまでも笑ってくれないのが男、反対にいつまでも何度でも笑い続けるのが女、と何かの小説に書いてあったが、正岡さんはいくら褒めても、それに飽きることはなかった。自分だったら、こんな歯の浮くような言葉、並べたてられたら、三回目くらいで嫌になるけどなあ、と思いつながら、持ち上げておけば何とかなる、くらいに考えて、彼女の作り上げた複雑巧妙なデータファイルや、几帳面に作り上げられた作業手順書のクオリティの高さを私は教えられるたびに「凄いですねえ」とボキャブラリーも少なく褒めちぎった。通常は私に対して無表情の彼女も、その時ばかりは少し相好を崩した。賛辞は惜しみなく受け入れるようだった。

入社して一月、教えられた仕事も少しずつこなせるようになり、彼女も私は比較的呑み込みの早い新人、と認めてくれたようだった。一月記念のその日のランチを正岡さんに誘われて、一緒に会社近くの定食屋に行った。同じ業務なのでランチのタイミングが合うことは当然多かったため、それまでも何度か一緒にランチに行ったことはあった。勿論、それほど嬉しい休憩時間ではなかったが、それでも先輩の誘いを断るわけにいかず、あまり疲れの取れない一時間を過ごしていた。殆どが彼女の話、仕事の愚痴と彼女の半生についての詳細かつ断片的な物語だった。その日、丁度一月の節目というので、お会計の時、正岡さんは私の分も支払いをしてくれた。一月経ったお祝いですよ、と言った。私は感動して、「ありがとうございます。こんな風に先輩に奢ってもらうのは初めてです」と素直に言った。事実、会社の先輩、同じ事務の先輩に奢ってもらったのは初めてだった。

帰宅後、夕食を食べながらの会話の中で、湧太にそれを話すと、「なんだ、いい人じゃん」と言った。「うん、ちょっと怖いけど、根はいい人みたい」「良かったね」そういつて、彼は屈託のない笑顔を見せた。

それから一月ほどは彼女との関係は良好だった、と言える。新人に無暗に甘い顔をしない仕事のできる先輩らしく接し方にはいつも大なり小なりの厳しさはあったものの、基本的には信頼され任されるようになってきている実感があった。彼女の仕事も徐々に私にシフトされるようになり、離陸後の飛行機が次第に安定した航路につくように私のこの会社でのポジションも安定してきたように思われた。入社後二か月ほどしたある日、正岡さんは会社を休んだ。妙齢の彼女の身体はやはり繊細のようで、二週間に一度は体調不良で欠勤する習性があった。少しずつ距離は縮まっているように感じられたとはいえ、威圧感のある先輩が隣にいないと、やはり気持ちは少し軽かった。雑務をこなしていると、上長から呼ばれてある仕事を頼まれた。それは、私が正岡さんから概要だけは聞いていたものだったが、まだ実際にやったことのない作業だった。それを別の部署の人に緊急で頼まれたので、ちよつとやってくれないか？ というのが上長の頼みだった。正岡さんとは長い付き合い合いらしい私の斜め前、正岡さんの正面の席に座る西野さん、という私より少し若い女の子が何だか心配そうにこちらを見ていたが、私は概要は説明されているのだからシステムに入ってやり方をさぐれば出来るのではないかと安易に引き受けてしまった。システムそのものに入っているQ&Aと正岡さんの作成した手順書に従って大卒の仕事をやり終えると、上長と他部署の人に大変有難がられた。私は何の気なしに一連のことを行っていたが、頭の片隅に西野さんの心配そうな表情が残っていた。

その翌日、正岡さんが入社し、私が昨日の出来事を報告すると、彼女は最後まで聞かずに「何でそれ勝手にやったんですか？」と静かに、それでもはつきりと怒りを含んだ語調で言った。私は狼狽えたが、こういう時は素直に謝るのが一番の得策だと思い「すみませんでした」と言った。が、彼女は私を見ることなく、「もういいです」と言っって何やら凄くスピードでパソコンのキーボードを叩き始めた。しばらくすると、私に仕事を頼んだ上長と他部署の社員が正岡さんと私の席の間にやってきた。二人は全社的に扱いづらいことが

有名だと思われる彼女にあからさまに下手に出ていた。彼女の言い分では、その業務に関しては彼女も元から手直しが必要だと思っていて自分なりに描いていた方策があったらしい。それを何も知らない新人が手を出して始めてしまったので計画が最初から崩れてしまった。これでは彼女の作った部分も無駄になるし大変困る、ということを書いて上長に食ってかかっていた。何となく私を擁護するようにも聞こえる言葉だったので、張り詰めた心の琴線が少しづつ揺さぶられ、嫌だなあと思っていたが、やはり泣いてしまった。私ももうすぐ妙齢を控えた年だというのに、まだ二十代前半の新人の女の子のように会社のデスクで涙を流すことを恥ずかしく思った。しかし、どうやらそれがまずかったようだった。というのも、泣いてしまったことで、上長と他部署の社員が私に対して、簡単に言うとう優しくした、ことが彼女の怒りを爆発させたのだった。実際のところは、何か特別に優しい言葉をかけられたり、慰められたりしたわけではない。ただ、さすがにデスクで泣き始めた私の様子に困って上長に医務室に行って休んでくるよう命じられただけだった。だが、医務室に行くのも初めてだったので、その他部署の若い男に案内でその階まで送ってもらったことなども含めて、彼女には何やら私が特別扱いされているように見えたらしい。彼女の思考回路によれば、私は「してはいけないこと」をしたのだから、当然怒られるべきだった。なのに新人だからという理由だか何だか知らないが、新卒社員でもあるまいに経験を買われて入社した中途社員のくせにデスクで泣いたくらいで男に肩を持たれて何という女だ、ということになったのだと思われる。もちろん、その日一日会話を交わすことはなかったが、彼女の態度はその日を境に明確に私を敵視したものに変わった。話しかけても無視されることが多くなり、しかしそれでも最低限、聞かなければ進まないことも多々あったので、恐る恐る話しかけると二、三回声を掛けて初めて返答をしてくるか、「少し待ってください」と刺々しく言われるかのどちらかだった。それで急ぎでないときは、上長をCCに入れてメールを送るようにした。

態度は日に日に悪化し、話しかけられるときは決まってこれ見よがしに大きな声で「高木さん」と呼ばれ、周りがしんと静まり返る中で、延々と説教をされた。重箱の隅をつつくように一つ一つ私の行った作業を過去までさかのぼって確認しているらしく、些細な不備を見つけ出せば「何でこんなやり方をしたんですか?」「この作業の意味分かってますか?」など返答したところで堂々巡りになることが明白な質問を投げかけてきては不毛なやりとりが続き、最終的に彼女がため息をついて、「もういいです」の一言で終わりになるのだった。委縮し怯えながら仕事をやる状況で悪循環が続く、彼女は数少ないお気に入りの中の一人である西野さんに「本当に使えない人間と仕事していると心身ともに消耗して困る」と私の隣で大きな声で、これ見よがしに言っていた。若いが随分人の扱いが上手い西野さんは、いつも彼女の言葉を上手に受け止めたり受け流したりしていた。

メールでも同じことだった。CCに部署全員が入っている状態であえて、ミスの指摘をされる。近くの席の人達や部署の人達に自分がどう思われているか、それを考えることすら無意味に近いような状況で、私はただ、正岡さんの機嫌・態度のみを気にかけ、それだ

けが職場における私の全てだった。ついに上司は、二日間有給をとって、気持ちを落ち着けるように言ってくれた。平日で湧太も休みをとれるわけもなく、また休みをとってくれるようお願いなどできるわけもなく、私はぼんやりと実家に帰り、母と箱根に温泉旅行に出かけた。すでに全うな判断力を失っていた私は、とにかくお土産は買っていかない悲惨な状況を招く、という強迫観念を抱き、可愛い箱に入った月見饅頭を買って帰った。だが、休み明けに出社すると、正岡さんの態度はさらに悪化しており、それでもお土産と差し出したお土産は、目の前でゴミ箱に投げ捨てられた。私は堪えきれずにトイレに行って泣いた。

\*

見てはいけないものを見た。

そう思った。年末だった。

私は、SNSの画面を見ていた。彼女が時々そこで、仕事の愚痴をこぼしているのを知っていたからである。会社の人事にフォローされて、そのつながりで会社の他の人達のタイムラインを見つけることができた。当然、彼女をフォローはしていない。ただ、彼女の現在の心境を把握しておくことは自分が職場で行動するうえで重要な指標になると考えて、私は探偵宜しく、暗い行為と知ってはいたが、そのタイムラインを頻繁に確認しにいった。そこには彼女の生活の一端、どこのレストランに行ったとか、何の映画を見たとか、そういった事柄と交互に、仕事の愚痴と思われるまさしく「つぶやき」が反映されていた。【四面楚歌】という四文字熟語だけが現れたかと思うと、【私にはそれを理解できない】という意味のフランス語が反映されることもあった。だが、その日、彼女の呟いた一連の内容は私の心を深くえぐるものだった。

【遅れてくるなんてありえない】

【親の顔が見たい】

断続的に呟かれたその内容は、その日の私の会議への遅刻を指したものに違いなかった。私は急に入ったその会議を知らされていなかった。そして、それを故意にかどうかは分からないが教えてくれなかったのは彼女だった。手の中の携帯の画面に映るそのたったの十数文字の言葉が世界の終わりを告げる呪文であるかのように、私は「ああ、もう終わりだ」と思った。ヒーターの前で蹲ってその画面を覗き込む自分は、部屋の中にただ一人であった。湧太は連日連夜、忘年会やら会食会やらで帰宅が深夜を過ぎていたので殆ど顔を合わせていなかった。今年の年越しはどうしよう。暗い何かを紛らわすような気持ちでぼんやりと私は考えていた。SNSのタイムラインをずっと下に流して行って過去の自分や他人の言葉を見るとはなしに見ていると記憶がゆっくりと逆戻りしていき、煩わしい今から束の間、逃れられるような気がした。延々と、私は携帯の画面を撫で続けていた。

その前年の年末、私は、友達と四人で伊勢・志摩に年越し旅行に行き、三重県の鳥羽で新年を迎えた。元旦は物凄い混雑だということで、大晦日に一足先に伊勢神宮にお参りし、鳥羽のシティホテルに泊まって、お正月は有名な伊勢湾の夫婦岩を見た後、鳥羽水族館を見学した。そして午後には鳥羽からフェリーで渥美半島の突端、伊良湖岬の港へと向かった。一人の友人の実家が浜松だったので、伊良湖から車で浜松へ向かってそこで解散、という流れだった。途上、「三島由紀夫の『潮騒』の舞台となった初島はここです」という船内アナウンスがあつて、丁度何か月前に読んだばかりだった私はいそいそとデッキに出て海に浮かぶ初島の写真を携帯のカメラで撮影した。冬の曇天の下の冴えない山影のような写真だったが、私はミーハー気分でうきうきとした。一緒に乗っていた人達には少し奇異な目で見られた。戻って客室の正面に据え付けられたテレビを見てみると、正月の特番でクイズをやっていた。川端康成の『雪国』の冒頭、「国境の長いトンネルをぬけるとそこは〇〇であった」の〇〇に入る言葉を、若い十代とおぼしきアイドルが「中国」と答えていて、私は声を出して笑ってしまった。他の人達はややうけ程度だった。皆旅疲れで会話も特に弾むでもなかったもので、私は携帯を取り出し、SNSのタイムラインを見始めた。「あけましておめでとう」に類する言葉や、初夢、おみくじ、初詣、といったような内容の書き込みが連なる中、時節柄、東京に住む私のタイムラインには箱根駅伝に関する投稿も多かった。その中に私は川瀬湧太君の眩きを見つけた。彼はM大学出身であった。箱根駅伝の常連校である。彼がM大学を応援している眩きを見て私は微笑ましく思った。こんな人と付き合えたらいいなあ、と思った。だが、それは無理だろうと思われた。

川瀬君は前職の人材広告企業での同僚であった。隣の部署にいた彼と直接関わったことはなかったが、営業成績が優秀で、目立つ華やかなキャラクターの人だったので、何かの用で私の部署のシマに来ているときなど、よく目で追っていた。声が大きいので、近くに來ているとすぐに分かった。背はあまり高くなく、筋肉質だった身体が酒と食とで少しふにやとしてきた営業にありがちな体つきをしていて、小学校くらいの時はさぞスポーツが出来たろうと思われる。色が黒くて四角い輪郭、一重の目、薄い唇と男性的な顔立ちで特に際立ってイケメンというのではないが、男性くささが性的な匂いを感じさせる、女好きのする顔ではあった。

仲の良い営業マンの中には彼と同期の人もいて、飲み会などで川瀬君の話題がのぼることがあった。そこで聞いた彼の話は、見た通りの華やかなもので、経験人数は百人を超している、とか営業一課のAさんと関係があつた、とかいうような話だった。Aさんというのは、髪の毛長い化粧のおかげもあるうが派手な顔立ちの女の人で、頭もよく仕事もできた。ああいう感じの人が好きなら、私などまさしく眼中にないだろうな、と思ったが、不思議と彼が心から去ることはなかった。

その春に私は会社を辞めた。景気悪化に伴い事務職の契約社員は希望退職制度でほとん

どが事実上の解雇となった。が、私は通常もらえないはずの退職金をもらって辞めることが出来たので特に不満を感じてはいなかった。それからすぐに、同じく会社を辞めて独立していた元同僚の会社に誘ってもらって、次の仕事が見つかるまでアルバイトという形で働き始めた。そこで同じタイミングで川瀬君も会社を辞めて独立した、という話を聞いた。私の元同僚が川瀬君の一年先輩だったのである。川瀬君は私の一つ下だった。その関係で、同じベンチャー企業同士のつながりで川瀬君は一度私の勤めていた会社に挨拶に来たことがあった。狭いマンションオフィスのダイニングを応接間代わりにしていて、お茶を出す、彼はそっけなく頭を下げた。社長が私を「彼女も俺たちと同じ会社にいたんだよ」と紹介すると、彼は私を見てあまり興味なさそうに「そうなんですか」と言った。私は、「やはり私は眼中にないな」と思わざるを得なかった。

それが六月に共通の先輩の結婚式の二次会で再会したとき、事態は一変したのである。私はその受付を頼まれていて、開場より少し早く行って、先輩の旦那さんの会社の女の子と二人並んで受付をしていた。「あれ、どうも?」というので目を上げると見たことのある男の子がにこにことしていた。「何してるんですか?」「受付です」「それは、見れば分かりますよ」と言って彼は笑った。会場に入っていく彼の後姿を見ながら、私はどうやら今日の自分は彼の目に良く映ったようだ、と確信した。

二次会では互いにそれぞれ知っている面子の輪の中にいた。部署が違った私たちは所属するコミュニティは別だったので、あえて話をするとはなかった。でもパーティーの間中何度か目が合い、お互いに気になっているような雰囲気があった。男女の関係が始まるときに良くある流れである。で、帰り際まで何か話しかけてきてくれるかと少し期待していたのだが、それはなく、何となくざわざわした気持ちのまま帰路についた。知った幾人かと飲みにいつて終電で帰りすぐにベッドに入って寝てしまった。翌日は大した予定のない日曜日だったので、起きたのは昼過ぎだった。いつもの癖でまず初めに携帯をいじりSNSをチェックした。SNSのメールボックスには川瀬君からのメールがあった。

\*

七月の最初の週だった。

有楽町駅の近くで私たちは待ち合わせをしていた。川瀬君はストライプの入ったネイビーのスーツを着ていた。男性は夏の暑い盛りもスーツを着ないといけないから大変だなあ、と思いつながら走ってきた彼を笑顔で迎えると、「急いだ感を出すために走ってきた」と悪びれることなく笑いながら言った。「こなれてるなあ」と思った。正直にいえば、女に困ることなどない人生を送ってきたことが明白な川瀬君とごはんに行くことは賭けのようなものだった。今現在、彼が私に興味を持っていることは確かだが、それがただの気まぐれか、他にも何人も女はいるのではないのか、それを見極めたい、というのが本日の狙いであった。もし遊びであったなら、それはそれでいい、と思っていた。こうして隣にすることが



不思議な人をここまで釣ることができたのだ。もう上出来である。

「実はお店を決めていないのだけど、いくつか候補があつて。タイ料理は好き？」

好きでも嫌いでもなかったが、初めてのデートでタイ料理は嫌だったので曖昧な返事をする。「ああ、ごめん。嫌いなんだね、じゃあ何がいい？」と、きっぱりと方向転換された。「まあ普通にイタリアンとか……」「ああ、好きそう。パスタとか好きそうだね」とにやにやしながら言われた。「うーん、じゃあドイツ料理とか、どう？」「この辺にあるの？」「うん、俺も一回くらいしか行ったことないけど、そこにしよう」

予想はしていたが、テンポの良い人であつた。

JR線高架下に連なる店の一つが、そのドイツ料理屋だつた。店先にはドイツ国旗が飾られ、よくある赤いギンガムチェックのテーブルクロスをかけた小テーブルが軒先に出されてメニューを描いた一メートル四方くらいの黒板が乗つかつていた。木製のドアを川瀬君が押して開いた。

蛍光灯ではなく裸電球が使われている店内はやや暗めで落ち着いた雰囲気であつた。私達は木製のテーブルに私が奥側に、向かい合つて座つた。彼はギネスビールを私はフランボワーズ味のビールを頼み、おつまみには彼がお勧めするソーセージの盛り合わせとサラダを注文した。川瀬君は終始、戦利品を見るような目で私を見た。好意的に思う相手だろうからだろうが、私はそのような不躰な態度すらも、裏表がなくて気持ちがいいと思つていた。彼は、飲んだり食べたりしながら、自らの輝かしい半生を語つた。

中学校にあがつたとき、先輩たちから「やりちゃん」とあだ名を付けられたこと。ただし、当時は当たり前だが童貞だつた。中学、高校とサッカー部の主将だつたこと。一浪してM大学に入り、大学在学中にベンチャー企業を立ち上げて地元を紹介するフリーペーパーを発刊していたこと。それが面白くて事業をやりたいと思ひ、起業家を多く輩出してきた私達のいた会社に入ったこと……。私はさして驚かずに聞いていた。なぜなら全て彼のSNSの紹介文に書かれている内容だつたからである。もちろん中学時代のあだ名のことなどは書いていない。話されている内容よりも、それを鮮やかに語る彼の喋りの手腕に驚かされた。彼の輝かしい経歴などはその時は余り重要に感じられなかった。ただ目の前でソーセージをつつく、その妙にあつたらんとした姿に「子供っぽい」といつても良い無防備さがあつて、私はそんな彼を「かわいい」と思つた。

ひとしきり自分の話をし終えると、彼は今度は私にむかつて、「これで俺の一通りの自己紹介は終わつたけど、凜子ちゃんはどういう人なの？」と聞かれた。私は彼のように華麗な経歴は持つていないので、「川瀬君の凄い話を聞いたあとで、自分のことなんて普通すぎてうまく話せないよ」というと、「そんなことないでしょ。そういうえげ大学はどこだったの？」と聞かれた。私は自分の出身校である八王子にある宗教系の大学の名を言った。「へえ、そうなの？」と少し大きめのリアクションをされたが、それだけで後は何も言わなかつた。彼の出身校に比べれば有名校という訳ではないのですぐに忘れてしまふだろう、と私は思つた。

二時間くらいしてその店を出た後、もう一軒行こうということで、彼のお勧めのお店、銀座の古いビルの二階にあるカウンターのあるバーに連れて行ってもらった。店には私達以外、若い男女二名ずつの小規模合コンと思しき一組の客が少し離れたテーブル席にいた。私達はカウンターに並んで座ってパーテンさんが目の前で作ってくれるカクテルを飲んだ。彼はお手洗いで帰ってきた私をじろじろと見て「やっぱ、俺は細い女の子が好きなんだな」というようなことを言った。痩せ型の自分を口説くのに「ぼっちゃりした子が好きだ」と言ってくる男はいないので、私はその言葉を真に受けることはしなかった。むしろ、一般的に「痩せている」ことはモテる要素であるように言われているが、自分の経験からすれば全く逆だという思いしかない。私は痩せている女が積極的に好きな男など実際には殆どいない、と頑なに信じていた。しかも彼の外見や印象は胸の大きい女が好きそうな雰囲気だったので、さらに怪しいものだ、と思っていた。それで、「川瀬君はおっぱいは大きいほうがいい、と思ったりはしないの？」と聞いてみた。かつて自分は胸が小さいことを理由に振られたことがあったので（そればかりが理由とは限らないだろうが）、それから少し、貧乳コンプレックスに陥っていたのである。彼は笑って、「いや、大きさとより形だよね」とよく聞く言い訳のようなことを言い始めたが、私は当然信じなかった。だが、それを否定しても仕方ないので、信じたような顔はしていた。程よく下ネタも入れれば男女の距離は一層近づくので、私達も大分親しみを増していた。彼は私の腰に手を回して「この細さはヤバイねえ」と言っていて喜んでいて。これは本音だろうな、と私は思った。そしてその気分は悪いものではなかった。

お酒を飲んだあと、私達は帰路となる有楽町の駅までの道を手を繋いで歩いた。川瀬君の手は肉付きが良く、汗ばんでいた。地下鉄で彼とは反対方面だったので、先に電車が来た私はそれに乗ってホームでお別れとなった。別れ際、彼が妙に神秘的な面持ちだったのでおかしく思った。電車が動き出し、永田町で半蔵門線に乗り換えたあと、しばらくすると、「やっぱ帰り帰さなきゃよかったな」とメールが来て、私はそれであんな顔していたのか、と一人で笑った。地下鉄の暗い窓に映る自分は思うよりも綺麗だった。いつもこんな顔をしていられたらよいのに。楽しい気分を引きずりながらも、ふと祈るような思いにかられて、私は暗がりから見返す自分自身の顔をじっと見つめていた。

それからしばらくSNSや普通のメールでやりとりを重ねたが、次にいつ食事に行くかは彼からのお誘い次第であったので、待つしかなかった。もう少し若かったら、やたらと不安になって自分からしつこく連絡をするようなミスを犯しかねなかったが、さすがにそれが何の効果もないどころか逆効果だということを完全に理解出来るようになっていた。ただ待っていた。一度、明け方四時くらいに携帯が鳴った。珍しく浅い眠りだったので、私はずいぶん気がついて電話をとった。「あれえ、起きてたんだ？」と川瀬君のはっきりとした声が多分少し酔っているんだろうと思われれる声でした。「うん、今起きた」「友達とサーフィン来てるんだ！ 海だよ、海！」

朝から楽しそうだな、と夢うつつで笑った。短い電話が切られたあと、すぐに私はまた眠った。その日の晩にメールが来て、次の週に会うことになった。

会う予定の土曜日の午後一時を過ぎても、具体的な待ち合わせ時間や場所の連絡は来なかったが、私はそれでも相手を急かすことなく待っていた。その時間をさして辛いとは思わなかった。自分で会社をやっている男が、そうそう暇な訳がないので、そこは待つしかない、と腹を括っていた、というより、それが今回の自分の戦略だった。川瀬湧太君のよいうなタイプの男が追いかけてくる女を好むわけがない。恋愛は情報戦であり、頭脳戦だった。だが、もう殆ど確実になった関係で、「戦」という言葉ほどの力みも重みもなく、随分と軽く爽やかな気持ちで自分はいた。好きな男からの連絡を待つにはよく適した、明るい夏の午後だった。ようやく三時を過ぎて川瀬君からメールが来た。

「ごめんね！ 遅くなって。打ち合わせが長引きまくってます。どこに行きたい？」

このタイミングで行きたいところを聞かれてもなあ、と困ったが、ここでする返事は重要だった。遠出をする時間帯でもないし、街歩きをする時間でもない。私はしばらく思索した後で、「豊洲はどうかかな？ 私行ったことないから行ってみたい！」と返した。豊洲は彼が当時住んでいた場所だった。果たしてすぐに彼から返信が来た。

「豊洲いいね！ 俺も住んでるけど、ゆっくり遊んだことないや。じゃあ豊洲に六時に来れる？」

こちらは準備万端だったので、すぐに「大丈夫だよ！」と返し、私は携帯で電車の乗り換え案内をチェックし、地元の駅を何時に出ればいいのかを確認した。家を出るまで一時間あった。すでに着ていた薄い生地の朱色のワンピースに合うと思しきバッグをいくつか引っ張り出してきて、コーディネートを確認したりしている間にその時間はすぐに経ってしまった。私は穏やかな期待感と共に家を出た。

地下鉄の豊洲駅近くの商業施設の入り口で待ち合わせをしていた。五分ほど早く着いたので、お店で服を見たりしながら彼を待った。六時丁度に彼から電話がかかってきて、入口に戻ると、そこにいた。白いTシャツと半パンにサンダルという格好だった。

「暑かったから家でシャワーを浴びてから来ました」

と彼は言った。彼は、豊洲駅近くのマンションで一緒に会社をやっている友人とルームシェアをしていたのだった。まだ夏の準備を全然していない、ということと扇風機を買いたいと彼は言った。それで、デザイン家具の店や生活雑貨の店、家電量販店などを見て歩き、結局最後に入った家電屋でレトロなデザインの扇風機を購入した。その頃には遅い夏の宵闇が迫っていた。私は家電屋の入り口近くにあった自動販売機でアイステイのペットボトルを買い、すぐに開けて一口飲んだ。川瀬君に「飲む？」と勧めると、「うん」と言っただけで、私からペットボトルを無造作に受け取ると彼も一口飲んだ。また私に手渡されたそれをバッグにしまいながら、この自然な一連の動作がいかにカッブルっぽいなど、少し嬉しく感じた。しかしまだ、はっきりとそういう関係になったわけではなかった。でもまあ、今日の夜くらいにはそうなるのだろうと、祭りじみた夏の夕刻の空気の中で彼と手を

繋いで歩きながら、私は予感していた。

晩ごはんはアメリカっぽい雰囲気のレストランの店で食べた。窓に向かって隅に置かれたテーブルの辺に隣りあって座りながら、ポテトや揚げた白身魚、エビといった脂っこいものを沢山食べた。窓から見える海は黒に近い群青色で、棧橋のある遊歩道を照らす街灯の明りをゆらゆらと映して波の動きを示していた。

「あの辺に石のベンチみたいなやつがあつて、寝っ転がれるんだよ」

と川瀬君が、窓からすぐそばに見える小さな棧橋の右側の手前を指して言った。

「後で行ってみようよ」

外に出ると夜になって気温が下がったのか、風もあつて涼しかった。冷房で冷えてもいたので私は少し寒く感じて腕をさすっていた。それを見て彼は「寒いのか？」と言つて私の手を取ると両手で私の腕をさすった。

「鳥肌がたっているね」

表情には本当に心配しているような様子が伺えた。

「冷え性なの」

そう言つて私は彼にぴったりとくっついた。川瀬君は笑つて私の腰に腕を回し、私達はその「石のベンチ」まで、ひつついたまま歩いて行つた。それは、人が二人くらい寝転がれる大きさの白い御影石で、海に面した歩道の芝生の斜面にいくつか間隔をおいて置かれていた。昼は家族連れも使用するかもしれないが、夜の海を前にしてはまさにカップル向けの設備としか言いようがなかった。そこに着くと私達はすぐに寝転がった。私はサンダルを脱いだ。彼の唇は暖かく柔らかく、自分の唇や耳や首に吸い付いた。夏の夜、海を前にこれほどの好条件はないと思われた。気が付けば周囲の全ての石には男女が寝転んでいて、一番近くの石にいる二人は、まさに何かを始めようとするような動きを見せていた。私達は好奇心にかられ、自分たちは絡むのを止めて、その様子を伺いながら息を殺して笑っていた。

「じゃあ、家に行こうか？」

と彼は耳元で言った。私は頷いた。

よくあることだが、初め彼は勃たなかった。

「最初は緊張するんだよね」

と言つていたが、こればかりは女性経験の多さに関わらず仕方のないことらしい、と思つて私は彼の胸に鼻をあてて笑っていた。恐らく私が笑っている理由は彼には正確には分からないからなかつたろう。その晩は女子サッカーのワールドカップ決勝が夜中に開催されていて、のどが渇いて起きた私達はリビングに行き、たまたまテレビをつけたら中継放送がやっていたので、まさに俄かファンの勢いで興奮しながら試合を見始めた。後半戦が始まったばかりのところ、その時はまだ同点だった。サッカーはワールドカップの日本戦くらいしか見ない自分であつたが、この優勝のかかった試合の緊迫感はずがに感じ取ることが出

来て、すっかり感情移入している川瀬君とともに熱しながら試合を見ていた。試合は同点のまま延長戦を迎え、それでも決まらずPK戦になだれこんだ。結局日本が三点を先取し、優勝が決まった瞬間には感極まり、大きな声を上げそうになってルームメイトに遠慮するように声を抑えた。この勝利はまるで関係のない自分達にとっても何か縁起良い事のような気がして、私達は満足しきって彼の部屋に戻った。まだ興奮冷めやらぬ明け方の生温い空気の中で寝転がりながらいちゃいちゃしているうちに、今度は大丈夫そうだと、となって最初のセックスをした。意外なことに彼はちゃんとコンドームを着ける人だった。性器は比較的大きかったので挿入の際には鈍い痛みを覚えた。扇風機しかつけていない夏の朝は暑く、汗で湿った肌は欲望を刺激した。だが、さすがに一晚中殆ど起きていた疲れによるのか、それほど長続きはしないで私達は果てた。終わってしばらく眠ってからは、恐らくそれでもまだ朝九時くらいだったが、もう暑くて寝ていられなかったので二人ともすっかり起きてしまった。湧太がシャワーを浴びている間にキヤミソール一枚でリビングルームのソファに呆と座っていると、部屋にいると思っていた彼のルームメイトが帰ってきた。私はあられもない姿を見られて恥ずかしかったが、その友達は余りにしない様子で簡単な挨拶をすると自分の部屋に入って行った。

それから二か月後に同棲を始めた。それまでは私は母親と暮らしていたのだが、タイミングよく、母は実家である祖母の家で暮らすことになり、湧太はもともと一年契約のルームシェアを解消する予定だったので、ちょうどよい、ということと一緒に暮らすことになったのだ。二子玉川を選んだのは、私の実家が近いことと、彼も実家に帰りやすい地点であったこと、思ったより家賃が安かったこと、が主な理由だった。

物件探しの時に彼は、学生の時にずっと付き合っていた女の子が二子玉川に住んでいた、と言った。

「その子のことたくさん泣かせたんでしょう？」

「何で知ってるの？」

と、湧太は驚いたように私を見た。私は笑って、「学生時代、女の子をとっかえひっかえ家に連れ込んで母親に怒られた、って話を前に私にしたじゃん」と言った。すると彼は、「学生ときは滅茶苦茶もてたからね」としれっとして言った。教室の真ん中で偉そうにしている「目立つ男子」の中心にいたのだろう、この人は。そう思うと小憎らしかった。

家具はそれぞれ持ち込みで何とかかなりそうだったが、食器棚やダイニングテーブルは新しく購入する必要がある、私たちは埼玉にある北欧からきた大型家具雑貨店に物色に出かけた。店内で彼は終始楽しげで、ベッドに転がってみたり、様々なパターンの部屋の内装のモデルディスプレイを興味深げに眺めては何かの参考にしているようだった。私たちは常時くっついていた。はたから見たら随分馬鹿げた雰囲気のカップルであったろう。だが当事者達はそんな周囲の目にはお構いなしで大変な幸福感に浸っていた。その日は下見程度のつもりで電車で来たので家具を買って帰るわけではなく、二人は楽しい気分のまま外

に出た。すでに夕闇の迫る時刻だった。体は夜の訪れとともに高揚していて私達は何となく駅の周辺をうろついて人気のない場所を探した。そうして駅の反対側の住宅地を少し歩いたところにあるトラック置き場のような所に辿りつき、一台のトラックの裏側で絡み合った。欲望が頂点に達したところで立ったまま事に及んだ。私のジーンズを膝のあたりまで下ろして背後から彼は上手にするりと挿入した。トラックの連結部分の隙間から、駐車場の砂利と雑草が風に揺れるさまが薄暗がりを通して見えた。夏の終わりのぬるい夜風の中で、何故か快樂はいつもより大きく、私は声にならない声をあげた。

\*

二月の夜は季節の終わりに冬の神様が全力を出しているのかと思われるほどの寒さで、やはりコートを手放すことはできなかった。今まさに着ているコートは朝方痴漢に汚されたものだななどは、ごはんを食べに行く友人に軽々しく話せることではなかった。結局私は今朝自分に起きたことを心の中だけに留めて、会社帰りの時間を過ごした。二子玉川駅から私達の住むマンションまでの道のりは多摩川沿いを走る多摩堤通りから一本奥に入った道をほぼ真っ直ぐで、多摩川が近いせいで開けた空は濃紺でオリオン座がくつきりと見え、プレアデス星団もうっすらと見えた。環状八号線と第三京浜道路という幹線道路がありながらも、やはり都心部より遥かに空気は澄んでいた。

家に着くともう十一時を回っていた。湧太はまだ帰っていなかった。特に連絡はなかったが、金曜でもあるし、このところ毎日でもあるので会食か飲み会かがあるのだろうと思った。私は部屋着に着替えるよりも前に、まずコートを四五十リットルのゴミ袋につめ、口元を結んでマンションの一階のゴミ集積所に持っていった。『液体』を洗い落とした時と同じく、なんの感情もない機械的な動作だった。むしろ、ここまできっぱりと何かを手放すのは、自分の優柔不断な性格からいくと余りなことなので気分が良かった。部屋に戻ると湯船にお湯をはった。湧太が帰ってくる前にお風呂に入っておきたかったのだ。それは体を清めたいという想い以上に、湧太を上手く誘うための下準備でもあった。風呂場では入念に体のチェックをした。まだ同棲する以前、デートの前をやったように、ひざ下の毛を剃り腋の毛を剃り、乳首の周りの毛も剃った。あとは最後、湧太に「予習」といつていること、をすれば完璧だった。中指を自分の性器に入れる。久しぶりにセックスをする前にはたいていそうしていた。そうでなければ、入口の小さい私の性器はスムーズに彼の性器を受け入れることができない。ゆっくりと自分の性器周辺を撫で回して緩やかに入口に湿り気が訪れるのをまつた。乳首がたち、じわりと濡れた性器に指を一本ゆっくりと入れる。生暖かく柔らかい自分自身の体の内部が感じられた。その指を何度か動かして性器の伸縮を良くすると、今度は人差し指と中指の二本をその穴の中に差し込んだ。入る際には、鈍い痛みを感じたが、奥にいくに従い、快感が押し寄せてきた。ちよと良く自分の興奮をかきたてたところで、指を出して、水中にあっても尚残る「ぬるぬる」をシャワー

で流した。鏡を覗くと蒸氣した赤らんだほほの自分の顔が映っていた。今日の感じならば、湧太を上手く誘えるだろう。私は満足して風呂からあがった。

結局、湧太が帰ってきたのは夜中の二時近くだった。ソファでうとうとしているとドアがあいた気配がして、はっと目が覚め、廊下まで出迎えにいった。しかし帰ってきた湧太は全身に疲労感を滲ませていて、私の出迎えもちらりと目を向けただけで、さっさとリビングの方へと入っていった。

「なんでまだ起きてるの？」

と、リビングの奥の寝室で服を脱ぎながら湧太は不機嫌そうに言った。私は嫌な予感がこみ上げてくるのを抑えながら、「テレビを見てたらソファのところで寝ちゃってたの」とできる限りの自然さを装いながら言った。しかし湧太は何も答えず、トイレに入って風呂場へ行った。私は流れを変えるために先にベッドに入っていることにした。

嫌な予感は消えるどころか、麻酔のように全身にゆっくりと広がっていき、痺れに似た不安な感覚が指先にまで達していた。目をつむり、なるだけリラックスするように自身身をしむけた。湯上りに体に塗ったバラの匂いのボディクリームが普段ならリラックス効果を生むところが、鼻につく臭いとして神経に触った。体中の神経が、この「嫌な予感」を打ち消すために、作動しているように思われた。だが、こういう場合は大抵、どのように記憶を自分に有利に継ぎ合わせて言い聞かせても、何らかの「流れ」を予知している上での「予感」というものに抗するには、余りにも脆弱な理屈しか構築することはできなかった。そうして不安は的中し、避けがたい事実として直面するとき、初めて居直る自分がいて、そしてそれもこの無常の人生において、うたかたの出来事として簡単に忘れ去られていく、それまでの一瞬の辛抱だと分かっている、やはり直面するまでの不安定な時間が最も辛い。そんなことをぐだぐだ考えているうちに、物音がして湧太が風呂からあがったことが確認された。ドライヤーをかける音が聞こえ、来るそのときにむかって緊張感が高まっていった。私はこの異常な状況の中で、最早自分が全く「そんな気」がなくなっていることにも気がつきかけていた。だが、それに関しては何とかなる、それに関しては自分にマインドコントロールをかければさして難しいことではない。ただ、湧太がその気にならなかつた場合、それがひたすら怖いのだ。

ドライヤーの音が消え、歯磨きをしながら湧太がベッドルーム脇のリビングにやってくる物音が聞こえた。歯磨きを続けながら、リモコンを操作してテレビをつけ、夜中までやっているスポーツニュースを見始めた。ニュースではヨーロッパのサッカーチームの勝敗とそこで活躍する日本人選手達について、キャスターが興奮気味にその成績を語っていた。サッカー好きの湧太は歯磨きをしながら、そのニュースを熱心に見ているようだった。どこかで、男女の脳は構造が違っていて、女は同時に複数の行動をとることができる、例えば、テレビを見ながら歯磨きをする、というような、それが男には出来ない、という話を聞いたことがあるが、湧太は大抵歯磨きをしながらテレビを見た。一瞬も時間を無駄にし

たくないというような、人生を充実感で埋め尽くすためにプログラムされたような彼の行動は、そんな陳腐な一般論からは常に少し逸脱していた。いや、こんな陳腐な一般論にすがっている自分のほうが、「普通」から逸脱してしまっているのだろう、そう考えて私は暗澹とした気持ちになった。五分くらい磨き続けてようやく湧太は洗面所に口をすすぎにいった。決戦のときが目前に迫り、私は自然体を装うために寝返りをうって彼の入ってくる戸口に対して背を向ける横向きの寝姿勢へ体勢を変えた。しかし湧太はまたリビングにもどって点けたままのテレビの前のソファに座ってしまった。ニュースの内容はサッカーではなくプロレスにうつっていた。彼がプロレスに興味があったかどうかは定かではなかったが、まだ寝るつもりがないのは明らかだった。私は拍子抜けして再度寝返りをうった。そして遂にベッドから起き上がると水を飲みに行くフリをしてリビングへ入っていった。

「まだ寝ないの？」

湧太は答えなかった。無表情でテレビを見つめるその顔からはなんの感情も読み取ることは出来なかった。

「眠くないの？」

水を一口飲んで、気まずさからくる不自然さを必死に繕いながら私は再度尋ねた。

「んああ」

湧太の返答はあからさまに面倒くさそうなものだった。私は胸の当たりから腹にかけて、感情の重りが一気に下がっていくような感覚を覚え、小さく「おやすみ」とだけ言って一人ベッドルームに戻っていった。そして男の隣で寝るときにたまにそうするように声をたずに布団の中で静かに泣いた。

\*

転職して間もない頃、九月だった。まだ正岡さんとも上手くやっていた頃である。引越し直前で、私は彼の家に行って荷造りを手伝っていた。ひと段落ついて、夜ごはんは何にしよう、という話になり、近からせつかくだし、ということ、月島にもんじゃ焼きを食べに行くことにした。残暑の日々で、私はサンダルだった。

いくつもあるもんじゃ焼き屋のなかで、彼が何度か行ったことがある、という和菓子屋の二階にある店に入った。こういう店らしく雑然とした感があったが、こざっぱりと気持ちの良い店ではあった。彼は上手に、もんじゃ焼きとお好み焼きを焼いた。私は食べるばかりだった。正直言って、料理は湧太のほうが上手だったので、同棲する前にも何度か作ってもらったことがあった。彼のゴーヤチャンプルーは絶品だった。私は男の子のように恋人の手料理を食べて、食後は皿を洗った。もんじゃ焼きを食べた記念に写真を撮ろう、といって、私はもんじゃすくいを手を持った状態で携帯で写真を撮ってもらった。本当に幸せなときの笑顔をしている、とその写真を見て思った。私も彼を撮ったが、彼はカエルみたいな顔で映っていた。それを見て笑うと湧太は慥然とした。



その日にした会話はよく覚えている。彼が自信家であることはよく承知していたが、「俺は自分のことが好きすぎて、見た目すらカッコいいと思っている」と言われたときは驚いた。「俺は世界で一番、俺自身のことを好きな自信があるね。たぶん、凜子が俺のことを好きな以上に、俺のほうが俺のことを好きだよ」

と、というようなことを堂々と恥ずかしげもなく言える彼に対して私は尊敬の念すら抱いた。だが、それは良いことなのだろう、と思った。自分とは真逆の人間に対して感じる畏怖の念のようなものが、私の彼への愛情の土台にあるのだろう。そういえば、これまで付き合ってきた男達も表現の度合いに差こそあれ、みんなナルシストだったな、と思い当たると、おかしくなって私は終始笑っていた。

帰り、少しは涼しくなったがまだ生ぬるい夜の下町を、月島から豊洲まで歩いて帰った。隅田川にかかる大きな橋を渡り、風が体中に潮の香りを染み込ませていくような空気の中を、手を繋いで帰った。道端に月見草が沢山咲いていた。「幸せだな」と私は言った。「幸せだな」と彼は繰り返した。たまにキスをしながら、私達は一緒に歩いていた。東京湾に注ぐ豊洲運河にかかる橋で、長い釣り糸を欄干から何メートルも下まで垂らしている男の人とそのそばに女の人がいて、湧太は「何が釣れるんですか？」と、唐突に男性に話しかけた。「スズキとかですわね」男性は親切に答えてくれた。「へえ、いいですね」軽く会釈してまた歩き始めた。歩いている人は他には殆どいなかった。夜の散歩は楽しく、幸せだった。私達は、満ち足りていた。おそらく、満ち足りていた。

\*

「え、お前、彼氏に相談してないの？」と吃驚したように言われて、私は視線を落とした。年明けだった。

私も湧太も実家に帰ってそれぞれの家族や友達と過ごしていた。私は久々に会った学生時代の友人に、会社でのことを詳細に語って今後どうするべきか悩んでいる、と告げた。彼は真摯に聞いてくれていたが、ふと「そーいやお前、彼氏と同棲してるんだよね？ 彼は何て言っているの？」

私は言葉に詰まった。正岡さんとの仲が本格的に悪化してから、私は湧太に会社の話をすることを意識的に止めていた。心配を掛けたくない、というのも理由の一つではあったが、何よりも彼に話して突き放されることが怖かった。実は少しだけ愚痴らしきものをこぼしたことはあった。上長から有給をもらって出社したらお土産を捨てられた日のことである。私は意気消沈して湧太にその一部始終を語った。彼は、「それは上司が悪いんじゃない。凜子が休んでいる間になんか余計なこと言ったんでしょ、その人に。でもさ、」と彼は続けた。「入社一月記念で飯奢ってくれる人なんだから悪い人じゃないって。凜子が成長すればその人も認めざるを得なくなるから」

彼の言うことはもつともだった。私は何も言えなくなって口を噤んだ。彼自身はもつと

大変な仕事をしているのに、自分のことばかりそうぐちぐちと言えるわけがなかった。それでもどうしても毎日、疲弊しきってマイナスオーラを全身から出しながら帰ってきて、夕飯を作ってただ男の帰りを待つ。テレビドラマを見て心を紛らわす。私に何の魅力があるだろう。と考えると絶望的な気持ちになった。彼自身も事業の立ち上げが思うように進まず、悶々としているようだった。事業と一緒に立ち上げた仲間と衝突があったりもしているようだった。彼も、私の様子を察して余り多くを語らなかった。会社に泊まってくることが多くなり、会話も減った。気が付くと一月ほどセックスしていなかった。クリスマスの日はさすがに一緒にごはんを食べたけれど、その日は生理だったので、口だけで済ましたのだった。

クリスマスというより、クリスマスイブの前日、イブイブの晩だった。私達は豊洲の商業施設に入っているレストランで晩御飯を食べていた。その日は土曜で翌日の二十四日は終日オフィスにこもって仕事だという彼の貴重な時間を割いてのクリスマスディナーだった。それでも朝から仕事に行ってしまうって夕方まで連絡が来なかったのを、ようやく十六時くらいにメールが来て、〈どうする？〉と言われたので、私はとっさに、〈ひさびさに豊洲に行かない？〉と返して、比較的彼のオフィスも近いので〈はいよ〉という返信をもらったのだった。付き合い始めの日と同じように私達は十八時に豊洲で待ち合わせをした。夏とは違って、その時間にはすでに夜だった。私達は映画を見てから、まさに最初の日と同じレストランでごはんを食べた。

その日も窓際の席で、半年前と同じように彼の背後には窓越しに夜の海が広がっていた。冬の海は夏よりも暗く黒かった。けれど波間に煌めくオレンジ色の街灯の光は、夏よりも温かみを帯びて見えた。向こうの方に見える鮮やかな色彩の点滅はお台場だろう。半年前よりも明らかに口数少なく、私達はまた脂っこい食べ物を肅々と食べていた。何となく互いに仕事の話は避けている雰囲気があった。私は彼に何年か前に行ったイギリス旅行についての話をした。一週間ほどの滞在で基本はロンドンにいたが、一泊だけスコットランドのエジンバラに行った。こじんまりとしながらも美しい古い街並みが強く印象に残っていたので、その思い出を彼に伝えたいと思ったのだった。

「エジンバラはすごく良いところだったよ」

「どう良かったの？」

そう尋ねられて、私は困惑した。とっさに彼に私の美しい思い出を完全に語るのには不可能だ、と思った。湧太の口元は笑っていた。けれども目は笑っていなかった。おかしな表情をするな、と思った。彼の背後は海で、暗い背景の中に湧太の顔だけがあるような気がした。その海は遙か彼方、ユーラシア大陸を挟んで遠く遠く、でも確実にエジンバラとつながっている。それは不思議な光景だった。彼の質問は軽い調子で投げかけられた。けれども、その問いには一種の鋭さがあった。感じたことを、感じたままにしてはいけない、そう言われているようだった。いや、ただ漫然と生きていることを否定されたような気が

した。その時ふと、彼の中に、この海と同質の暗く冷たい他者を寄せ付けない孤独があることを、強く感じた。誰にも理解されることを拒む、暗い夜の海のような孤独を彼は抱えている。そして、それは彼の矜持なのだ。でも、私にもそういう海はあるのに。彼はそれを感じてはいないだろう。そしてこれから先も感じることはないに違いない。

彼は、私に興味などないのだ。

——この海のように、私と彼との間にも、私と彼とのそれぞれの孤独が広がっている。

\*

いつの間にか眠っていた私は緊張感によるものか何度か夜中に目を覚ました。しかし、何度目を覚ましても傍らに湧太はいなかった。いい加減リビングの電気も消え部屋中が暗く、微かにベランダから月光か電灯かわからない光が差し込んでいくくらいの薄暗い部屋の中にあつて、起きる度に少し泣いては寝、泣いては寝を繰り返した。そして、いつも男と別れるときは大抵こんな感じの夜を過ごすんだよなあと思つて、枕元に置いていたスマートフォンを手に取り誰も見るのではない日記アプリに「死にたい」の四文字を何十組も書き連ねた。布団の中で白く光るスマホの画面に呪文のように連なる「死にたい」の文字列に言いようのない虚しさど、そして少しの滑稽さを覚えた。湧太はソファで寝ているらしく、微かな寝息が聞こえる。そうまでして一緒に寝たくないのかなあ、と思うと到たまれなかったが、「そのとき」に直面してしまつたからにはもう居直るしかなかった。むしろ、「予想」はとつづくに出来ていたので。自分の会社を軌道に乗せるというポジティブでなければ成立しない仕事に取っ組み合う湧太に、その仕事でネガティブなものを抱え込んで毎日家に帰ってくる私のような存在は、到底受け入れられるものでなかつたらう。仕事ができつくなればなるほど、湧太に対して申し訳なさど劣等感が募ってくるのは致し方のないことだつた。そんなことは考えなければいい、愛情があれば気にならないはずだ、と幾ら自分言い聞かせても消えることのなかつた感情だつた。その屈折した感情が湧太に伝わっていたのか、それとも元の私の「予想」が的中していたのか、それは最早どちらでもいいことだつた。今の私に残された道は夢を見ること以外にはなかつた。

翌朝、それでも疲れていたのだろう、起きるともう十一時を回っていた。よろよろと起き上がりリビングに行くど、ソファに湧太の姿は無かつた。トイレに行き、洗面所に行くど寝巻きにしているジャージが洗濯機に放り込まれてあつた。どこかに出かけたのか、少しほつとして私は顔を洗い化粧水を顔に染み込ませ、乳液のピンを化粧水が乾いた後から塗るべく、手にしてリビングのソファに戻っていくと、ソファの腕置きに頭をかけるようにして寝そべりテレビを点けた。土曜午前から始まつている情報番組で、元気の良い可愛らしい女の子たちが新しく出来たというレストランだかカフェにいつて、その味を殊更強調し褒め称えている。自らのそれと大きく隔たりのある彼女たちの鮮やかな色彩は見えてい

て息苦しさを覚えるほどでもあったが、何か騒がしいほどの音があったほうが今の状態を耐えるには都合がよかったので消さずにいた。ガラス瓶のポットにティーバッグを入れお湯を注ぎ、紅茶を入れる。カップに注がれるときの、透明な水と紅茶の染み出した夕日色の層が美しいグラデーションを作っていて、ほんの少し美しいものに心を慰められた。牛乳を注いでミルクテイにして、それを飲んだ。

まだ少しうとうとした状態でミルクテイを飲みながら、ご飯を炊いて卵焼きをつくるか、パンを買ってきてフレンチトーストを作るかと遅い朝食についてなんとはなしに悩んでいると、湧太が帰ってきた。男が一人入ってくると狭いリビングは途端に窮屈な空間になる。湧太は大柄ではないが、小柄でもなく、また「生きている」感じを強く漂わせる人間だったので、彼のいる場の空気は自然と薄くなり、私は少し呼吸が苦しくなったように思った。湧太は扉のところ立ち尽くしたまま、唐突に口を開いた。

「俺、この家出るわ」

私は、何も答えずに湧太の目を見つめた。片目だけにフォーカスしてじっと、相手を凝視し続けた。私は予想が現実になった瞬間に最早覚悟を決めて居直るしかない状況に追いやられたと感じた。

「ごめん、別れよう」

そう言った時、その言葉の意味する内容のためか、私の執拗な視線に気圧されたのか、唯我独尊の気のある湧太の目も少しだけ怯んだ色を見せた。それで、私は自分の感情の動きを見せることなく、じっと湧太の目を見続けていられた。張り詰めた感情が緩んでしまつたら、自分はきつと取り乱して、一層この事態を悲惨なものにしてしまうだろう。それでは、自分が惨めすぎる。

「うん」

絞り出すような声で、私は一言だけ応えた。湧太はこの返答に少しほっとしたようだった。しかしこの瞬間が、私には一番応えたのだが。

そのあとは、事務的な話だった。三十万円を銀行口座に振り込んでおくから、家の引き払いと引越し代の足しにしてくれと湧太は言った。俺はこの土日で荷物を片付けて実家に戻るから、と。終始、湧太は断定的な口調だった。私が反論できないようにあえて強圧的にしているようにも思えた。

私はさすがに彼の荷物づくりを手伝う気にはなれず、話がひと段落するとシャワーを浴びて化粧をし、家を出た。外はからりと晴れた良い天気だった。昨日とは違ってかわって、二月にしては暖かく、春を思わせる空気は散歩に適していた。歩いて実家まで帰ろうかな、と思った。実家には今住んでいる二子玉川から三駅ほど電車に乗れば着く。晴れた美しい街を歩きながら、私の頭に「♪何もいいことが無かったこの街で」という母がよく歌っていた昔の曲の一節がやたらと流れた。「良いこともたくさんあったんだけどな」と携帯を取り出して例の日記アプリの誰からも見られることのないタイムラインに書き込んだ。「何もいいことが無かった、この街。でもこの街は好きだ」

二子玉川の街は美しい。作りかけの大きな街、という感じがする。上野毛の高台にかけての勾配には、東急創始者の五島家の豪邸とその敷地に建てられた五島美術館がある。雑木林になっている国有地や、鳥獣保護区指定の自然公園があり、部屋の窓から緑の斜面が見えると東京に住んでいることを忘れるほど長閑な気分になった。住宅の密集具合も世田谷の他の地域よりもゆったりとしていて、空が広く、近く感じられた。歩道の並木や灌木、民家の前庭を飾る花々も美しかった。秋は街路樹のハナミズギが鮮やかな赤に染まり、澄んだ水色の空に良く映えた。きつとこれから来る春はもっと美しいことだろう。たとえそれが作られた自然であったとしても。豊かさが可能にした人工的な美しさであったとしても。私にはなお、この街が愛おしかった。

こんな日は、他人の色めき立ったタイムラインなど、決して見たくはなかった。自分の内側の世界にこもりながらも、それでもこの閉塞感には何らかの形で風を吹き込みたいという感情が、私の目を空へと向けさせた。廃校になった高校が、そのまま公文書館、とかいう余り用途が分かり兼ねるものにそのまま使われていて、週末には子供たちが広い校庭でサッカーや野球をしていた。公文書館というのは建前で、本当はこの子供たちのスポーツ場を奪うのに忍びなく、行政が珍しく気を利かせたのかもしれない、というようなことを私は考えていた。その公立にしては広い敷地に学校時代と変わりなく校舎を囲むように外壁沿いに背の高い銀杏の木、桜の木といった木々が立ち並んでいて、その木々の梢がまだ葉はつけないでいるものの、桜の木などは特に灰色の芽のうちにあの美しい花を潜ませて含み笑いをするような秘められた躍動感をすでに醸し出していた。男に捨てられた三十手前の女の感情などとは余りにも無関係な、澄んだ青空を背景に裸の木々の梢さえ美しく見える早春の日だった。

「もうコートはいらないや」

駅までの道沿いにある小奇麗なカフェに入ってカウンターに座りカフェラテを飲みながら、手持無沙汰にひらいた日記アプリに私は呟いた。もうさすがに今年は冬用のコートを買う必要はないだろう、スプリングコートなら去年買ったものを着ればいい、痴漢に汚されて捨てたコートの代わりは来年の流行を見て買おう。来年の冬は私は何をしているのだろう。新しい男は出来ているだろうか、まだ今の会社で働いているだろうか、今の家に暮らしているだろうか、色々な考えが忙しなく頭の中を行き来していたが、何一つまとまりそうもなかった。考えるべきことは沢山あった。引越しをどうするか、どこに引越すか、それとも実家に帰るか……。

考えているうちにカフェラテも少なくなり、いよいよ暇になった私はやはりリアルなSNSを開いてしまった。そして、もはや一種の癖で、正岡さんのタイムラインを見にいってしまった。彼女は、金目鯛の煮つけを作ったらしく、写真をアップしていた。薄い赤地に金糸で刺繍をしたような鯛の姿は美しく、確かに美味しそうであった。この人、ヒステリックでさえなければとつくに結婚できただろうにな、と思うと自分自身に向けた言葉の

ようでヒヤリとした。私もまた彼女と同じように孤独な三十代になるのだ。そう思うと気持ちは暗くなつたが、何とはなしに正岡さんの存在が恐ろしいものから身近なものに変わった気がして、暗い夜に少しだけ灯がともった気がした。思えば、男がいる、という意識が私に無意識に彼女に対して優越感のある態度を取らせていたのかもしれない。そうだとしたら、彼女が執拗に私を嫌ったのも理解できる。勿論、そんなことを思うこと自体が傲慢であるのだろうが。そして、それを思う自分には最早、何も無くなり、私と正岡さんの間には年齢の差があるだけで、私の前に伸びた暗い道をとぼと歩いていけば、いつか彼女の姿に自分が重なるのかも知れない。

\*

宣言通り、湧太はその土日で荷物をまとめ、家を出ていった。二人で折半で買った家財道具もほぼ全て置いていったので、目下生活に困ることなかったが、やはり一人分の存在が消えた部屋はこれまでよりも遥かに広く空虚な感じがした。空虚感を最も如実に表していたのは玄関で、玄関を入れて右手の壁に扉がついて靴の収納ができるようになっていたのだが、靴を沢山もっていた湧太がいなくなつたことで、靴箱の空きが異様に目立つた。恐らく三分の二は湧太の靴だつたと思われ、八段くらいある靴箱で最早伽藍堂になっていく段もあるのを見ると虚しさが込み上げてきた。不思議なことに涙はそれまでの別れに比べて余り出なかった。もう三十になろうというのだから、十代や二十代前半のようなポピュラーソングの歌詞に感情移入するような恋愛など出来る訳もなかったが、何か自分の恋愛の仕方すら大人になるに従って事務的になってきている気がして、私はうら寂しい気持ちを感じた。前よりも道を行くカップルや若い夫婦に気を取られることが多くなつた。昔は殆ど気にもかけていなかったのになあ、そう思うと何か不思議な気がした。

しばらくの生活は彼氏と別れた、というゴシップネタに付き合ってくれる友人達との連日の飲み会でつぶれ、お蔭で深刻な孤独にも陥ることなく、家に帰るのはむなしなことではあったが、やはりこの家に留まってしまった。何もなく過ぎる日々はスカスカの靴箱のようでもあり、私は帰宅してからの時間をひたすら、携帯でSNSを見ることとテレビを見ることに費やした。

唯一つ良いことがあつた。それは、会社に行くことが前ほど苦痛でなくなつたことである。あの日以来、少しでも正岡さんに近づいた気分になつた私は相変わらずの彼女の攻撃をさほど気にしなくなつた。彼女だけではなく、他の人達、腫物を触るように接してくる上長・同僚そういった面々のおかしな空気すら特に気にならなくなつた。あなた達が私にどんな危害を加えようと、私は今、二子玉川の駅から多摩川に飛び降りてもおかしくないくらいに苦しみを抱えているのだから、それ以上の痛みをお前らは私に与えてくることなど出来はしないのだ。そう会議中に心の中で呟いて、いい気になつていた。誰も私の心の

中のことを知らないのだから、それくらいのアドバンテージは持っていないはずだ。

私は一つ新しい仕事を任された。それは毎日出勤後すぐに、前日の営業成績をチームごとに取りまとめて表にランキング形式で部全体にメールで広報する、というものだった。三か月間限定のチーム制のキャンペーンで優勝チームには食事代として金一封が出る、ということ、チームの名前はあるアニメの登場人物になぞらえて設定されていた。私はメールにそれらのキャラクターの画像を貼り付けて送った。それ自体は、私の仕事に対する工夫と認められたのか、正岡さんからの茶々は入らなかった。

しかし、何日目かに事件は起きた。私が送ったメールにおいて営業成績の数字の集計が間違っている、と正岡さんがまた全員返信で指摘を入れてきたのである。それ自体は最早慣れていたが、何度も確認した数値であったのでいくら検証しても間違っている箇所が分からなかった。そうこうしているうちに、メッセージャーが立ち上がり、正岡さんから「私のメールを見ましたか？」と来た。

「はい、今確認中です」

「早く確認してください。この結果を部全体が待っているんですよ」

「はい、すみません。確認しているのですが、何度計算してもこの数字なのです」

「昨日の数字より少なくなっているのはおかしくないですか？」

「はい、そうですね、ですが、どの数字が昨日より少なくなっているのか分からないのです」

「分からない、というのはどういうことですか？ 明らかに間違っているのに」

「何度計算してもこの数字なのです」

「私の目がおかしいのですか？」

「いや、目はおかしくないと思います」

ここまで来て彼女はようやく自分が誤って認識していたことに気が付いたようだった。「あ、確かに昨日より少なくなっているのはないですね。失礼しました。私も人間なので、こういうこともあります」

そう書くと、彼女は速やかにメッセージャーから退席した。私はメッセージャーの入力スペースに、「奇遇ですね、私も人間なんです」と打ち込んだ。だがエンターはきらずにバックスペースで一文字ずつ消していった。

\*

湧太と別れてから一月ほど経った。三月半ばである。友達と夕ごはんを食べながら、ゴールデンウィークの旅行について計画を立てていた。

友達がお手洗いに行って席をはずしている間、私は携帯を取り出してSNSを見た。湧太の投稿があった。ホテルのレストランにタグ付けされていて、綺麗な高級コスメシヨップの袋が映し出されていた。私はその意味を解しかねてじっと画面に見入った。特別なこ

とは何も書いていない。昨日は、ホワイトデーであった。私は画面を閉じた。彼女が戻ってきて私の正面に座った。「何かあった？」と不審げに聞かれたが、私は首を振って「何も？」と聞き返した。心がざわめいていたが、「そういう事か」とも思っていた。

記憶を掠めるものがあつた。年末ぐらいから彼は会社にいる女の子の話をよくしていた。彼女も元同僚で、営業をやっていた私の知らない子で頭がよく経営にもチョコチョコ口をはさむので面倒だ、と文句を言っていたのである。しかしそこは女の勘で、何やらざわめくものがあつたので、SNSを見ながらもどれがその子なのかを無意識に探している自分がいた。恐らくこの子だろうと私が目星をつけていたのは大変な美人だった。写真写りのせいとばかりは思えない花筋の通った目鼻立ちのくつきりとした典型的美人で、モデルみたいだった。ファッション関係の仕事を目指しているという話を聞いていたが、確かにおしゃれでもあつた。とにかく、職場においても劣等感の塊になっていた私は九馬身差の美女の登場に内心穏やかでなかったが、彼の前でそんなそぶりを見せるわけにはいかず、随分と抑圧された感情を抱えていた。たぶん、彼女なんだろうな、と真偽は定かではないが、思った。それはほぼ確信に近かつた。でもまあ仕方ない。九馬身差もつけられたら、落馬でも起きない限り、勝てるわけがない。妙にすつきりとした気持ちで私は帰路についた。暖かい早春の夜だった。オリオン座はもう見えない。桃が咲いて、水仙の匂いが微かに漂っていた。

\*

シャロットのむすめ。

何かの呪いをうけて高い塔の狭い部屋に閉じ込められた伝説の中の娘は、一日中世界の出来事を映し出す不思議な織物を織りながら過ごしていたという。私はそんなシャロットの娘さながら、小さな画面に映し出される誰かの人生に起きている美しい出来事をただ呆然と眺めて暮らす。感情は最早何も無く、世界を壊してくれる騎士ランスロットが現れる心配すら無い。テレビの大きな画面と、手のひらの中にある小さなスマートフォン画面と、織り出される巷の光景は無数にある。一人のソファの上で、私は現代のシャロットのむすめさながら、呆然と画面を撫で続けている。